

## 多摩市における園芸ボランティアを成功に導くための基礎研究(2)

### -活動を充実させ、その自主性を高めていくために必要なこと-

山 浩美(本学非常勤講師)

澤登 早苗(人間環境学科)

#### 1. はじめに

筆者らは地元多摩市において園芸ボランティアを成功に導くためには何が必要であるか、本学はどのように関わっていくべきかを明らかにするために、2007年度から基礎研究を開始した。初年度は園芸ボランティアの養成において実績のある関西地方における先進事例の調査の第一段階として、東大阪市で開催された緑化ボランティア養成講座に参加するとともに、1年間ボランティア講座を受講した修了生たちが大阪府立公園で実践しているボランティア活動の現場を視察した。

その結果、関西地方には受講料を払って花壇づくりボランティアについて学びたいと思っている人が多く存在していること、園芸ボランティアとして活動する際には、セミナーで「園芸の知識と技術」と「ボランティア活動」の両方について事前に学ぶことが当たり前のこととして受け入れられていることが明らかになった。一方、ボランティアの実践現場では、ボランティア＝無償の労働奉仕ではなく、「時間を提供することで、園芸活動を通じて更なる知識や技術を得ることができる」体制が整えられており、このことが自ら考え、活動できる実働可能な花壇ボランティアの養成に大きく寄与しているものと考えられた。

そこで、本年度は関西地方において活動しているタイプが異なる2つの園芸ボランティアグループに対して詳細な聞き取り調査を行うとともに、多摩市及び周辺地域における園芸ボランティアの活動概況の把握を試みた。本稿では、これらの結果をもとに園芸ボランティアとして活動を充実させ、そ

の自主性を高めていくためには、何が必要であるか検討した。

## 2. 提案型活動の見本 せんなん里海公園「ハーブタペストリー香の会」

「ハーブタペストリー香の会」(正会員22名)は、大阪府の南端に位置し、天気の良い日には対岸の淡路島や明石海峡大橋を眺める場所にある大阪府営公園、せんなん里海公園(阪南市箱作)で活動している。作業は毎週水曜日、冬期は朝10時から、夏期は9時半から弁当持参、雨の場合や作業が多い時期は、予備日として金曜日も加わる。

活動の中心は、公園内の「風の丘・香の丘のハーブ園」の維持管理。特に目を引くのは、自然植生と宿根草をベースにしなが、こぼれたタネで育つ丈夫な一年草を加えたメドーガーデンである。このメドーガーデン(写真1)は、景観としてその場所に似合っているという理由と維持管理しやすい(作業と資金の両面から)という考えから、このグループが提案し、完成したものであるという。

「風の丘」という名前の通り、海に面しているために海風が吹くこの場所では風とどのように付き合うかが植栽を考える上で重要なポイントとなってくる。草花を植え替えるたびに強風によって煽られ、根づかずに枯れるという、都心の花壇とは違った悩みを抱えている。そんな厳しい環境を熟知しているメンバーは、活動場所だけに限らず、公園内のあらゆる場所において植物による装飾効果を発揮しつつ無理なく維持管理できるような提案をしているという。例えば、ツリーサークル部分に乾燥に強く丈夫な多肉植物を植えてロックガーデン風にしたり、花壇全体が一年草主体の植えかえ花壇だったところに宿根草を混植して植えかえの面積を減らし、経費節減に役立ったこともあるという。

調査に伺った日は、月に一度の定例会の日であった。その月の作業について簡単にポイントを抑えながら説明し、皆で確認しあっていた。特に今の時期に取るべき3種類の雑草について見分け方や取り方について誰もが分かりやすいように説明されていた。また、翌週の祭日に予定されていた地域の人を対象にした講習会用の、試作品を見せながら作り方や材料の仕入れなど



写真1 春には風になびく花が咲くメドー  
ガーデン



写真2 タネから育てて定植を待つ苗たち

について相談していた。

このグループは、ハーブ園やメドーガーデンの維持管理だけではなく、自然学習のための講座やハーブの料理、自然素材を使ったクラフト作成などの講習会も企画運営している。また、有用微生物による生ゴミをリサイクルした堆肥づくりの普及活動のほか、会報を発行するなど市民に向けての緑化啓蒙といった広報活動も併せておこなっている。

もともとグループの発足のきっかけとなったのは、公園が新設された時、あまりにも殺風景だったので、公園事務所のパートさんたちが花壇作りをはじめたことだという。その活動が周辺の住民に広がり、やがて正式のボランティアグループとして活動が開始された。ちょうどその頃、大阪府の「緑花ボランティアリーダー養成講座」(期間は一年半)が開催され、その講座に参加したメンバーが、園芸ボランティアの基本的な知識や技術の導入に努め、それを受講したメンバーが主になってその後も集まり活動しているという。

会として活動を開始する際には、行政との間に覚書を交わし、活動の目的、年間計画書の提出、活動日誌、費用の負担について取り決めを行い、責任の所在を明らかにしている。また、会則をつくるほか、会員名簿の作成、活動計画や報告、予算書と会計報告などが適宜行われていることから活動に責任をもって当たっているという印象を受けた。



写真3 講習会のための試作品を皆で相談



写真4 活動を記録して会報誌を発行する

### 3. ゼロからのスタート「ウッディーガーデンクラブ」

兵庫県尼崎市のボランティアグループ「ウッディーガーデンクラブ」(8名)は、市が主催した園芸ボランティア養成講座に3年間通った人たちが中心になって活動している。

この養成講座は、初年度の参加者150名からはじまり、一年終了するごとに試験を受け、初級から中級、上級へと進級するというやり方でステップアップしていったという。内容は、タネ播きから育苗、花壇への植え付けという園芸の技術はもちろん、花壇の効果やデザインのしかた、ボランティアとして活動する意味など、花壇づくりボランティアとして活動できるようになるために必要な知識も併せて学ぶものだったという。

このグループの特記すべきところは、市主導のボランティア活動の画一的な花壇づくりにあきたらず、レベルの高い花壇づくりをめざし、花壇の場所を自らが探し、交渉し獲得しているという点。また、アダプト制度ではないが、場所と水の提供だけを受け、資金的な援助なしに活動を継続していることである。花壇は、第三セクターが運営しているスポーツクラブの敷地内にあるが、偶然にも当時施設側が周囲の緑地部分の維持管理を持って余っていたというのもタイミングが良かったと言える。このような場所を見つけるといってもその地域の住民ならではの機知に富んだ行動といえる。最初は空き地の草取りからはじめ、少しずつ花を植え続けているうちに花壇の効果が認められるようになっていったそうだ。「次は何を植えるの?」と楽しみにさ

れている方も多く、余剰苗は販売してタネ代に充てられるまでになったという。今では7か所の花壇を担当し、敷地の一部に育苗場所も確保して、タネから育てた花苗で花壇を管理している。



写真5

メンバーの皆さんと花壇。木製鉢はご家族の愛情こもった手作り品敷きわらの中には、元気に育つデルフィニューム。(09年3月)



写真6 07年夏。徐々に花壇を広げていく



写真7 08年春。ストックやロベリアなど

植えられている草花を見ると矮性のスイートピーやフィリオフェラ、デルフィニューム、ルピナス、アグロステンマ、モモイロタンポポなど、いずれも簡単に購入することができない花壇に向く花が沢山植えてあった。花壇をデザインする際のお話を聞くと、7つの花壇すべての平面図が作られており、必要な花の数量がすぐに計算できるようになっていた。また毎回、「今度の花壇はどのようにしようか」と考えながら工夫していること、「こんな花壇があったら面白い」と自分たちが思えるようなものに挑戦しているということ

とだった。[よく見かける花壇]ではなく、規制の観念に囚われない自由な発想でつくられた花壇は、見る人を刺激し、ワクワクとさせる何かを感じさせているのではないかと楽しそうに話してくださる方々を前にして思った。もちろんそれぞれの花壇を取り巻く環境を知り、その場に合った植物の種類を選べること、デザインのもつ効果などについて講座で3年間にわたって学習した知識の裏付けがあればこそと言えるだろう。



写真8  
09年3月。フィリオフェラやパンジーなど  
ブルー系の花と矮性スイートピー



写真9 08年春。花盛りの花壇



写真10 08年夏。ポチュラカとコキア

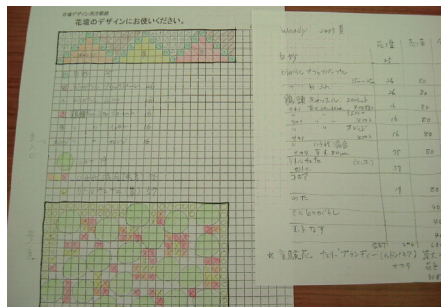


写真11  
講習会で習った花壇の設計。種類ごとの数量表を作って苗の生産計画をたてる。  
ウッディガーデニングクラブの09年(夏秋花壇の設計図)

#### 4. アダプト制度の多摩市の場合

多摩市では、アダプト(里親)制度が一般的に用いられている。これは公共の道路や公園、緑地などの緑化や清掃美化活動を市民の手で行う制度で、あらかじめ多摩市と相談し、場所を決め、合意書を取り交わしたうえで活動が認められるものである。

市内で活動する「おちあい・つるまきガーデンクラブ」をお訪ねして話を聞くとともにいくつかの花壇を見せていただいた。花壇は、集合住宅や店舗の前の広場や遊歩道の中央部など、通行する人が眺めて楽しめるような場所に作られていた。原則として植える花苗は自前で用意することになっているので、花屋さんで苗を購入するにしろ、タネを播いて育てるにしろあまり大きい花壇だと必要な花苗の量が増えて負担が大きくなる。また、タネを播いて苗を作るには、育苗にかかる時間や手間、その際必要となる園芸の知識や技術などの面でもなかなか難しいということのようだ。取り組みは、場所によって異なっており商店街などの商業地帯では、美化活動することは、町の活性化につながるという利点があり歓迎されることが多いが、活動時間や手間に制約があり思うような活動できないもどかしさを感じているという。一方、住居地帯では、もともと緑が豊かな多摩市であることからこれ以上の緑化活動(たとえば花壇づくりという花を用いた活動であっても)は不要であるという意見も聞かれるという。そのため、集合住宅の管理費用から花苗代を捻出することに対して了解を得ることは容易でないという。

#### 5. 覚書と合意書

今回調査した関西のグループは一般のボランティアであり、一方の多摩市の場合はアダプト制度であるという違いはあるものの、公共の場を使用することに対する責任が伴うという点では同じである。そこで、この観点から、行政と交わしている書類の項目を見ながら考えてみたい。

表1には、大阪府営公園内で活動する せんなん里海公園「ハーブタペストリー香の会」と財団法人大阪府公園協会臨海公園管理センターとが交わしている覚書と、多摩市内で活動する「おちあい・つるまきガーデンクラブ」と多摩市とが交わしている合意書より抜粋したものをまとめてみた。

表1 公共の場における園芸活動に関する覚書および合意書

	(財)大阪府公園協会との覚書より	多摩市との合意書より
活動の計画	毎年度当初に一年間の計画書を提出し、承諾を受ける	なし
活動の報告	毎回の活動終了後に、当日の活動内容、人数などを日誌に記入し提出する	年間活動計画書を提出
活動の支援	会議室の使用 消耗品の支給 コピー機の使用	花壇の確保 ボランティア保険の加入 アダプトサインの設置 清掃用具の貸与 活動に必要な助言
有効期間	平成20年4月1日から 平成21年3月31日まで	平成16年4月23日から 平成17年3月31日まで (初回のみ、その後なし)

ボランティアの活動内容は場所により多様であるが、いずれにしても公共の場を使うということに変わりはない。どういふかたちであれ相互が責任や資金の分担についてあらかじめ取り決めし、記録しておくことが必要であろう。公金の使用が伴う活動に対しては責任を負わなくてはならないし、当然周囲から期待もされる。活動後は、少なくとも報告書を出す必要があるだろう。また、お互いが常に良い意味での緊張感をもった関係であることが望ましい。この覚書と合意書を比べてみると行政がどのように考え市民に期待しているかをある程度ではあるが読み取ることができる。

## 6. それぞれの活動から見てきたこと

今回、関西地方で活動するボランティアグループを調査して気が付いたことは、せんなん里海のボランティアグループは、行政との間に覚書を交わすことで活動の内容を明確にし、必要な支援を受けながら持っている知識や技術を存分に発揮しながら貢献するという関係が成り立っていた。もちろん、2000年のグループ設立当初からそのような関係ができていたわけではない。多くの苦悩や試練を乗り越え克服しながら行政との信頼関係を築いていった。また、ボランティア仲間との関係づくりについても、園芸の基本



的な知識や技術を共に学び、ボランティアの役割について理解するという共通の認識の上に活動し、結束を確固たるものにしてきた結果だろう。花壇の維持管理という実働の他にも、会員名簿作成や会則づくりなど花壇の作業とは直接関係のない事についても、責任をもってスムーズに活動するために必要なこととして取り組んできたのは大きな意義がある。

ウッディーガーデンクラブは、最初は活動する場所はなく予算もないという、まさにゼロからスタートしたボランティアグループである。ただ彼らにあった最強の技は、どこに、どんな花壇を作ると効果があるかを知っており、その場に似合った草花をタネから栽培することが出来る花壇づくりのノウハウと、ボランティアとして地域に住む人たちと共に活動するためのノウハウだった。だからこそ花壇の場所を探しだし、徐々に周囲に認められながら活動の場を広げていけたのだろう。

この二つのボランティアグループは、活動の基本的な条件が異なるだけでなく、大阪府と兵庫県という異なる地域にありながら共通しているのは、いずれもしっかりとした園芸ボランティア教育を受けていることである。

以上の二か所とは全く異なるのが、多摩市のアダプト制度である。材料の調達も美化活動もおまかせする、という制約の無さは、ある意味では計画書や活動日誌の提出を求められていないなど気楽であり活動しやすさを生んでいる。しかし、一方では、それぞれが負担を最小限にとどめようとして花壇の面積を小さくし活動も広げないような結果になってしまっているようで残念でならない。もちろん一方的な規制ばかりされたのでは、アダプト制度という制度事態が成り立たなくなるだろう。自分たちの住む街に自分たちがイメージした花を用いて花壇を作る楽しさを味わうこと、そして地域の人たちが集まり、協力することでひとりひとりの負担がそれほど大きくない活動にしていくことが今後の課題となるのではないだろうか。

## 7. まとめ

今回調査した関西で活動する二つのボランティアグループと、前回調査した大阪の二つのグループの計四つについて考えてみると、活動の形態は大きく三つに分けることができるだろう。

(1) せんなん里海公園の「ハーブタペストリー香の会」と前回の浜寺公園「グリーンメイツ」タイプ：ともに公園がまず存在していて、その公園の花壇を美しく維持管理するという、明確な活動目標があり、その目標に向かって知識・技術・情報の習得に努めたり、グループの活動システムを整備し、向上させるために、勉強している

(2) 尼崎市の「ウッディガーデンクラブ」タイプ：行政が主導して、町の美化という緑化活動をボランティアでやらせようとして養成した人達が、知識や技術を習得した結果、行政主導の花壇づくりに飽き足らずに、自分たち自身でレベルの高い花壇づくりをしたいという理由で自立した

(3) 河内花園の「花づくりボランティアの会 園芸なかま」タイプ：鉄道(近鉄電車)の高架化に伴う再開発事業によって、駅前を中心とした町並みが大きく変化することから、周辺の商店や住民たちが、新設される駅前広場や公園などの管理をボランティアですること自分達自身の町づくりを目指してボランティアグループを作り、活動をはじめたもので、地域の住民が主導した例

これらの3つのタイプの全てに共通しているのは自主性であり、ボランティアを行う側とボランティアを受ける側とが対等の関係を結んでいる、または結ぼうとしており、互いに出来ることと出来ないこと、やってもいいこととやってはいけないことを出来るだけ明確に分けていることである。相手の立場を尊重するということが基本にあり、それをある程度明確にしたものが覚書、あるいは合意書といえる。これらの文書の取り交わしは、いずれのボランティア活動においても行われているが、文書の内容が詳細であるほど活動が活発であり、行政とボランティアグループとの互いの関係が良好であるように思われる。それは、この文書が互いの活動を制約するためのものでなく、互いの役割を明確にするために交わされているためであろう。

しかし、こうした現状が十分に理解されず、多摩市の場合のように形式的なものとなっていることも少なくないようである。これは、行政およびボラ

ンティアグループ、両者の認識不足が原因であり、ボランティア教育が適切に行われることで解消される問題であろう。今後、大学がかかわっていく際には、ボランティアに対しては作り上げたカリキュラムにそってボランティア教育を行い、また、行政に対してはボランティアとは何か、ボランティアに何が出来るかを正しく認識させる必要がある。そのことが地域の中でボランティアの知恵と技術を最大限に活かすことにつながるからである。

調査した関西すべてのグループにも共通していた考えは、活動をより効率的に、より効果的に行うためには、しっかりとした園芸ボランティア教育を受ける必要があると認識していることであった。そのために、行政から受ける支援である補習についても、講師や講習内容についても積極的に関わり、その要望にそった講習が考えられていた。ボランティアグループが企画した講習会を行政が支援として費用を負担したり、あるいは市町村だけでなく民間からの助成金を獲得して講習会を開催するなど、ボランティア育成計画としてカリキュラムを作り、ボランティアのレベルアップと新しいボランティアの獲得を目指すことも考えられている。

今回の調査によって、園芸ボランティアとしての活動を充実し、継続させ、さらに自主性を高めていくためには、そのために必要な知識や技術を系統立てて学ぶことがもっとも重要なことであることが改めて明らかになった。それためには、花壇をつくるための単なる園芸教室ではなく、花壇とは何か、花壇の役割やその効果などを理解し、ボランティアとして活動するために必要な園芸の知識や技術、さらにボランティアとしての基礎的な知識などを教育するシステムが必要となる。適切なプログラムによって教育されたボランティアは、その場に応じた提案ができる上、何も与えられていない場所においても何が必要でどうすれば良いのか、自ら考え行動に移すことができる。そういう人材を育てていくことが本来目指すべき園芸ボランティア教育であろう。

一方、多摩市においては街の中に地域の人たちでつくる花壇があることの良さについて十分に理解されているとは言えない現状があることが明らかになった。そのため、今後は美しい花壇をつくることは、景観の向上だけでなく、それ以上の波及効果があることを伝えていく必要がある。特に、環境

問題が深刻化している今日において、植物による二酸化炭素排出量の削減やヒートアイランド効果の軽減など、緑の効果について情報を積極的に提供していく意味は大きいと思われる。まだ、調査事例が少ないために、十分な調査ができたとは言えないが、今回、多摩市において聞き取り調査を行ってみて、花壇ボランティアに対する考え方や状況が、関西とかなり異なることが明らかになった。その一方で、大学が隣接する町田市は、35年前から花壇コンクールを開催し、現在では市内の450を超える団体が参加していることも明らかになった。

そこで来年度は、多摩市、町田市など大学周辺において実態調査を実施し、その実態に合わせて、本学は何が行う必要があるか、具体的に何をしたらよいかを提案したい。